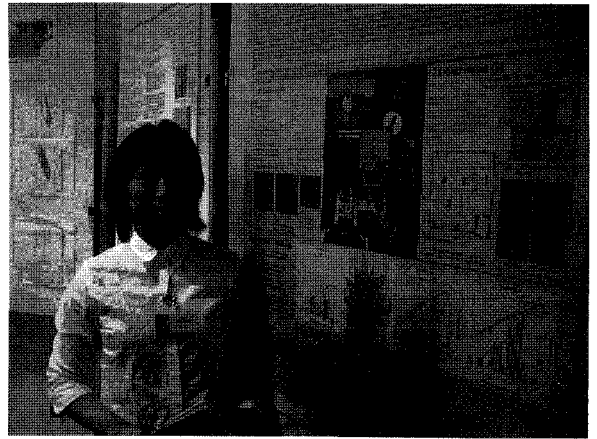


日本天文学会 早川幸男基金による 渡航報告書

早川幸男基金から旅費の給付を受け、2001年6月11日～26日にイタリアのシチリア島で開催された「Asteroid 2001」と「The 6th course in the School of Space Chemistry」に参加してきた。ミラノ経由で夜遅くパレルモ空港に着いた時は、長旅の疲れのせいで憧れの地中海へはるばるきたという感激はなかった。ところが一夜明けて見た地中海の景色は一面のブルー（空も海も澄んでいてみごとに青い）。東京の湿潤で懸濁した空気の中で過ごしている者にとって、この澄んで乾いた空気を通ってくる地中海の日差しはヒリヒリと痛い。遠景の解像度が驚くほど高い。植物はみな頑丈で勢いが良い。そこから中で生命が輝いている。これぞ憧れの地中海だ!!

Asteroid 2001は、最大の小惑星Ceresの発見200年記念を祝って催された国際研究会である。世界中から小惑星の研究者が集まり、観測的・理論的な視点から得られた最新の小惑星描像が議論された。地中海のこの島が会場に選ばれたのはCeresがこの島のパレルモ天文台で発見されたからである。参加者は約250名（おそらくバカンス目的で来た研究者の家族も含む）のうち、日本からの参加者は20名弱とかなり多かった。小惑星の研究は現在、レーダー観測や惑星探査機による観測の進展に支えられ、力学的な側面から物性的な側面に中心を移行しつつある。実際、この研究会での発表テーマも三割以上は何らかの意味で小惑星の物性に関するものであり、興味深い講演が続いた。

引き続き6月18日～25日には、同じシチリア島のEliceで開催されたサマースクールThe 6th course in the School of Space Chemistryに参加した。ここでも講義の中心は小惑星、特に地球接近天体の物性であった。私はこの両研究会に於いて、すばる望遠鏡で観測したサブkm小惑星のサイズ分布に関するポスター発表を行った。この観測結果は



「Asteroid 2001」のポスター発表会場にて

従来の小惑星サイズ分布の通説を大幅に修正するものであり、小惑星の力学的・物性的状態に新たな制約を与えるものである。このポスターへの関心度は非常に高く、100部準備した資料は全部売り切れた。世界中が注目するすばる望遠鏡を用いて得られた成果という点からも、少なからぬ関心を集めたと思う。すばる望遠鏡関係者の方々には、太陽系科学・惑星科学分野の研究者がすばる望遠鏡に対して寄せる大きな期待と関心をぜひ記憶して頂きたい。

Ceresの発見から200年を経た現在、人類の手は小惑星の表面に直接届こうとしている。小惑星Erosへ人類最初の痕跡を残したNear-Shoemaker探査機の探査や宇宙科学研究所を中心として進行中のMUSES-C計画は、これまでの小惑星研究の歴史に新たな要素を加えるはずである。自分自身の研究分野が新しい局面へと前進する時代に居合わせた僥倖は、研究者冥利に尽きる。そのような状況の下、今回のような貴重な会議に参加するための旅費を援助して頂いた早川幸男基金には心から厚く御礼を申し上げたい。

吉田二美

(国立天文台特別共同利用研究員／神戸大)